

第36回
山下太郎学术研究奨励賞
第34回
山下太郎地域文化奨励賞

授与式

令和7年6月15日(日)

一般財団法人 山下太郎顕彰育英会



授与式次第

- 1 開 式
- 2 理事長あいさつ
- 3 山下太郎学術研究奨励賞授与
- 4 山下太郎地域文化奨励賞授与
- 5 来賓祝辞
- 6 受賞者あいさつ
- 7 閉 式



選考委員会の講評

次代の指針に

一般財団法人 山下太郎顕彰育英会
理事長 山下和男



「第36回山下太郎学術研究奨励賞」及び「第34回山下太郎地域文化奨励賞」の授与式を迎えるにあたり、受賞者の皆様には、これまでの業績に敬意を表しますとともに、心よりお祝いを申し上げます。

学術研究奨励賞は、秋田県出身又は秋田県内の研究機関に所属する若手研究者を対象として、独創的で優れた研究業績を上げ、今後の活躍が期待される方に贈る賞で、今回もまた、様々な分野から多数の応募がありました。選考委員会による厳正な審査の結果、農業・食品産業技術総合研究機構研究員の渡邊高志氏と、国際教養大学助教授の橘保貴氏のお二人に決定いたしました。渡邊氏の研究テーマは流通青果物の課題解決で、3年前には真摯な研究姿勢が評価され選考委員特別賞を受賞していますが、今回は更に進展した研究業績が認められました。橘氏は、創生直後の超高温であった宇宙に満ちていたとされるQGP素粒子の理論的研究を行い、その成果を専門の学術研究誌に発表するなど、顕著な研究業績が高く評価されました。

また、地域に密着した研究や活動を継続的に行い、地域文化向上に貢献された個人や団体に贈る地域文化奨励賞には、郷土の歴史・文化を調査研究するとともに次世代への継承に取り組んでいる「藤里町郷土史愛好会」と、地域の社会教育施設の充実を目的に環境整備や情報発信などの支援を行っている「ほろわんぱく友の会」の2団体が選ばれました。

山下太郎は誠実を旨として幾多の事業を興し、国益に大きく寄与しましたが、未来を担う若人への支援も惜しみませんでした。その根底には、幼い頃に母から諭された「人のためになる行動を」という教えがありました。太郎が設立し、戦後復興の象徴的な存在の一つであったアラビア石油は、今年3月、これもまた太郎が設立に深く関わった富士石油と合併し、解散となりました。海外油田の利権協定終了後、実質的な事業活動を終えていた状況から、解散は避けられないことではありましたが、太郎が大きな夢を成し遂げた会社であっただけに、寂しく感じます。

結びに、本日、学術研究奨励賞を受賞されたお二人には、研鑽に励み、更なる研究の進展を果たし、次代の模範となりますよう、また、地域文化奨励賞受賞の皆様には、今後も地域の文化向上と発展のため、貢献活動を実行されますよう期待いたします。

山下太郎学術研究奨励賞

今回も多様な分野で活動をしておられる多くの若手研究者からの応募があった。選考にあたっては、対象とする研究課題の解決にあたり申請者が如何に中心的な役割を果たして成果に結びつけたか、そして、今後国際的な活動を含めて研究展開をどのように図ろうとしているか、という視点を中心に意見交換した。結果として、渡邊高志氏ならびに橘保貴氏を受賞者と決定した。

渡邊氏は、青果物が流通過程で商品価値を失い、廃棄される割合が無視できないというフードロス問題に対して、学術分野横断型研究を行い、青果物の品質評価技術を確認すると共に、高品質に保つ長期流通技術の開発・実証を試み、多くの成果を得ている。同氏は3年前本賞選考委員特別賞を受賞したが、その後の成長も顕著で、とくに近年得た、青果物に関わる低温障害発生メカニズムに関する食品物理学的知見は貴重である。これまでの成果をもとに、今後、流通技術の進展を通して、国内はじめアジア地域を含めた国際的連携によって、実際の青果物ロス削減に寄与することが期待される。

橘氏は、宇宙形成プロセス解明に取り組み、将来性を感じさせる成果を得ている。宇宙創生(ビッグバン)から10 μ s後までという短時間の間、超高温状態にある全物質はクォーク(Q)とグルーオン(G)のプラズマ状態(P) (QGP)で宇宙を満たしているが、同氏は、QGPの内部探査を目指して、素粒子ジェットが起こす衝撃波を用いるシミュレーションを行い、仮想度(virtuality)の導入によって実験値を理論的に説明付けることに成功した。今後、本理論研究の更なる展開によって初期宇宙の温度変化を記述するモデルが提案でき、たとえば暗黒物質(ダークマター)生成の道筋の解明に寄与することが期待される。

山下太郎地域文化奨励賞

このたび、栄えある「山下太郎地域文化奨励賞」を受賞されました2団体の皆様、誠におめでとうございます。

藤里町郷土史愛好会様は、2018年に会員2名からスタートした団体ですが、町の伝統文化の保存と継承に向け、地域に足をしっかりとつけた活動が高い評価を受けました。人口減少により、地域の担い手確保や持続可能な活動が困難な状況の中、会員が年々増え、フィールドワークや様々なイベントなど多種多様な活動が継続的に行われており、確かな将来性も感じました。

ほろわんぱく友の会様は、前身の「後援会」から約50年にわたり保呂羽山少年自然の家活動を支援し続け、子どもたちを主とした自然体験活動を支える大きな力となっています。大人を対象とした事業にも関わり、自然体験を通じた学びのよさを次の世代に伝える道筋を付けることは、人口減少や地域コミュニティの希薄化といった課題に対応し、地域貢献にも寄与するものと感じました。

両団体が研究・活動に真摯に向き合っていたに心から敬意を表し、講評いたします。



渡邊 高志氏

農業・食品産業技術総合研究機構 食品研究部門・研究員

現住所…茨城県つくば市
 生年月日…1990年8月11日（満34歳）
 出身地…秋田県由利本荘市
 専門…ポストハーベスト工学、青果物収穫後生理学、
 食品物理学、生体電気化学
 学位…博士（農学）／千葉大学

経歴

2009年3月 秋田県立本荘高等学校 卒業
 2013年3月 岩手大学 農学部 農学生命課程 卒業
 2015年3月 岩手大学 大学院農学研究科 修士課程 修了
 2015年4月 農業・食品産業技術総合研究機構 採用 食品総合研究所配属
 2016年4月 農業・食品産業技術総合研究機構 食品研究部門（現職）
 2023年4月 岐阜大学 客員准教授（併任）

研究の概要

流通青果物のロス削減を目的とする 学術分野横断型基礎・応用・実証研究

国際社会が取り組むべき持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）では、世界的な人口増加による食料不足やその格差問題が懸念されており、大幅な食料の増産とそれをロスすることなく流通する技術が必要である。日本の国会で成立した食料・農業・農村基本法の改正法でも、国民の食料安全保障が基本理念の柱に位置付けられた。国内の農業生産・食料供給能力の飛躍的向上を目指すためには、将来的な常の供給先の出口としては、国内市場に加え、人口とともに拡大する海外市場を積極的に活用できる輸出を通し、農業事業者等の収益を確保する方向への転換が必要である。

輸出等、食料の長期流通の重要性が増す中で、青果物は、特にいたみやすくロスになりやすい。青果物は収穫後も生理活動を続けており、安易に冷凍等ができないため、ロス削減に対してハードルが高く、学術的かつ実践的な研究が必要な食料である。受賞者は、流通青果物のロス削減という1つの問題に対し、食品物理学、生体電気化学、トランスクリプトミクス、メタボロミクス、ライフサイクルアセスメントなど、課題解決に必要な技術・知識を自身で習得または該当する専門家との研究チームを構成し、研究計画を遂行した。各分野を特化しただけでは至らない新規な発見を重ね、大学・企業等とロス削減・品質保持技術の開発や効果検証を行うとともに、多くの共同執筆論文が国際誌を筆頭に掲載された。今後も、流通技術の開発を通し、国内および世界の青果物供給量および価格の安定化や、誰もが健康的な食事や栄養バランスの調整に不可欠な青果物をいつでも適切な価格で得られる世界の実現に向けて研究を進めたい。



橋 保貴氏

国際教養大学・助教

現住所…秋田県秋田市
 生年月日…1987年3月5日（満38歳）
 出身地…福岡県北九州市
 専門…物理学（原子核理論）
 学位…博士（理学）／東京大学

経歴

2005年3月 明治学園高等学校 卒業
 2010年3月 東京大学 理学部物理学科 卒業
 2012年3月 東京大学 理学系研究科 物理学専攻 修士課程 修了
 2013年4月 日本学術振興会 特別研究員（DC2）
 2015年3月 東京大学 理学系研究科 物理学専攻 博士課程 修了
 2015年9月 西日本工業大学 非常勤講師
 2016年3月 華中師範大学（中国）粒子物理研究所 博士研究員
 2017年10月 ウェイン州立大学（アメリカ合衆国）物理・天文学科 博士研究員
 2020年4月 国際教養大学 国際教養学部 助教（現職）

研究の概要

高エネルギー原子核衝突でのジェットを用いた クォーク・グルーオン・プラズマの理論研究

あらゆる物質は、分子や原子といった構成要素に分解できる。原子は原子核と電子に、原子核は核子へとさらに細かい構成要素に分解できる。現在知られている、物質を構成する最も細かい要素は素粒子と呼ばれる。クォークやグルーオンと呼ばれる素粒子は、重力や電気・磁気のかとは異なる「強い相互作用」と呼ばれる力で強く結びつき、核子を形成している。この結合は非常に強固で、通常環境ではクォークやグルーオンが単独で現れることはない。しかし、温度を上げることで、物質はさらに細かい構成要素に分解される。摂氏数兆度を超える超高温では、クォークやグルーオンも、強い相互作用の束縛を逃れて、ばらばらの“プラズマ”状態であるクォーク・グルーオン・プラズマ（QGP）となる。誕生直後の宇宙は、全体がこのような超高温であり、QGPで満たされていた。QGPの性質の解明は、物質を形づくる強い相互作用や宇宙の進化の理解において重要である。

現在、地球上でQGPを人工的に生成するために、高エネルギー原子核衝突実験が行われている。超大型の粒子加速器を用いて原子核をほぼ光速まで加速し、衝突させ、超高温状態を実現してQGPを生成する。このような衝突では、「ジェット」と呼ばれる高エネルギー粒子の束も生成され、QGP中を通過する。私は、このジェットを通じてQGPの性質を明らかにする理論研究を進めてきた。たとえば、ジェットを構成する粒子はQGP中のクォークやグルーオンと衝突するが、その衝突頻度は、ジェット粒子の持つ「仮想度」と呼ばれる物理量が大きいほど抑制されることを、数値シミュレーションと実験の比較により明らかにした。さらに、ジェットは通過の際にQGP中に衝撃波を形成する。衝撃波の形成から伝播を記述するモデルを構築し、数値シミュレーションを行うことで、ジェットが起こす衝撃波を用いてQGP内部の流れの構造を識別できる可能性を、理論的に示した。



藤里町郷土史愛好会

会長 成田 貴之氏

事務局…秋田県山本郡藤里町
会員数…21名

沿革

- 2018年9月 「藤里町郷土史愛好会」設立
- 2020年5月 初の主催事業 第1回フィールドワーク 開催
- 2021年11月 会報発行スタート 会報「鑛(あらがね)」第0号配布
- 2023年3月 主催事業「藤里昔ばなし会」初開催

研究の概要

藤里町の歴史・文化の研究と、次世代への継承へ向けた情報発信

私たち藤里町郷土史愛好会は、2018年に会員2名、年間予算1,000円から活動を開始しました。

設立のきっかけは、町の歴史や文化に詳しい郷土史家の方が少なくなっていく中で、町の歴史・文化の面白さを多くの人に知ってもらうために、小さなことでも何かできる活動はないかと考えたことでした。

設立当初は、主にWEB上で藤里町の歴史や文化に関する情報を発信したり、公民館の事業に協力したりすることが中心でした。活動費もほとんどなかったため、お金をかけずにできる活動を工夫して続けていました。

細々と活動を継続する中で徐々に会員も増え、最近は各種団体の研修や学校の総合学習などで声をかけていただく機会も増えてきました。

2021年以降は会報『鑛(あらがね)』を概ね年1回発行しており、WEBでの情報発信と併せて、より多くの方に情報を発信できるようになりました。

また、2023年からは町に伝わる昔話を紹介する主催事業「藤里昔ばなし会」も開催しています。会場には白神山地に関連する施設や、廃校になった小学校の古い校舎など、町の歴史に関わりがある場所を選び、お話以外の部分も楽しんでもらえるよう工夫して取組んでいます。

今後も引き続き町の歴史・文化について調査を行うとともに、ホームページやSNS、会報発行やイベント開催を通して、町の歴史や文化を「伝える」活動にも継続的に取り組んでいきたいと思っています。



白神山地世界遺産センター藤里館での昔話会の様子



ほろわんぱく友の会

会長 高橋 征徳氏

事務局…秋田県横手市
会員数…116名

沿革

- 2001年5月 「ほろわんぱく友の会」発足
- 以降、前身の「秋田県立保呂羽山少年自然の家の後援会」を継承し、利用者が充実した自然体験活動等ができるよう環境を整備するとともに、材料等の提供に係る業務の協力・支援を行ったり、利用者の拡大に向けた情報提供活動を実施。

研究の概要

ふるさとの自然体験が生み出す「学び」をつくる

小・中学校の学習指導要領には、自然の中での集団宿泊活動等を実施することの有用性や活動を通して道徳性が育まれることへの期待が示されており、そのために多くの学校が自然の家を利用しています。子どもたちの人間関係の希薄化、自然体験の減少といった生活の状況の変化を踏まえ、自然体験活動を学校の教育課程に位置付けて行うことは特に重要と考えられてきました。

保呂羽山少年自然の家(愛称:ほろわんぱく)は、主に小・中学生を中心に自然体験や宿泊体験学習ができる社会教育施設として地域の協力を得ながら運営を始めて47年目を迎えました。また、学校だけではなく家族や友人、仲間とともに参加できる主催事業を計画的に実施したり、学童保育、就学前教育施設、企業などを対象にした出前講座も行い、多くの分野からの要望に応える活動を継続しています。私たち「ほろわんぱく友の会」は保呂羽山少年自然の家の運営方針等に賛同して組織され、発足当初より施設内外の環境整備や活動の材料提供等の協力・支援を継続してきました。令和5年6月には保呂羽山少年自然の家の利用者が100万人を突破しましたが、その歩みに本会が携わることができたことをうれしく思っています。

今後は保呂羽山少年自然の家とより強い連携を図り、幅広い年齢層の方々に自然体験の素晴らしさを実感してもらえるような取組を充実させていきたいと思っています。そのために、情報をより積極的に発信したり、新たな企画を推進したりする役割を担っていきたいと考えています。



ほろわんぱく主催事業への協力の様子

財団法人 山下太郎顕彰育英会

設立趣意書



我が国経済は近時急速なる発展を遂げ、世界有数の経済大国と云われるまでに成長いたしました。この原動力となったものが我国民一人一人の資質の高さにあったことは言をまちません。

格別の物的資源を持たない我が国にとって、人的資源こそは唯一究極の財であり立国の基盤であります。

我が国の先人たちはこの一点を洞察して早くより教育に力を注ぎ、国民の能力向上をはかるべく様々な施策を実施して不断の努力を重ね、その結果として今日の我国の繁栄がもたらされましたことは同慶の至りであります。

しかしながら、一方で豊かさの恩恵に浴さない人々がなお多数いることも看過しえない事実であります。

世界は日々変動し、今日その主要な構成員となった我国が世界平和と繁栄のために担わなければならない役割は山積しており、立ちふさがる諸問題を解決し、来たるべき21世紀を実りある世紀とするためには、以前にも増して教育の振興が片時もゆるがせにしない事柄であります。

戦後アラビア石油株式会社を興した山下太郎は、生前、教育の重要性を深く認識し、その出身地、秋田県大森町に対し、奨学金を20年間に亘り寄附する他、高校建設資金を寄附、また出身校北海道大学に生物科学研究所を寄贈する等、個人的に教育への助成、振興に情熱を燃やしてまいりました。

平成元年は、山下太郎生誕100周年に当たり、この記念のときに、山下太郎を顕彰し、その遺徳を実現するために、向学心に燃える前途有為の学徒等に対して奨学援助を行い、また、学術研究を行っている研究者、研究団体に対する研究助成等を行ない、もって社会有用の人材育成の一端を担い、青少年教育の振興に寄与するため、財団法人山下太郎顕彰育英会を設立しようとするものである。

平成元年9月8日

設立者 山 下 文 子